

# 語り継ぐ 日本の都市環境デザイン

## 北陸そして金沢にこだわる都市環境デザイン



水野一郎 Ichiro Mizuno

1941年生まれ。金沢工業大学教授。教育支援機構顧問。1964年東京大学工学部建築学科卒業。1966年東京芸術大学大学院修士課程建築学専攻修了。1966～1976年(株)大谷研究室にて大学、集合住宅等の設計に携わる。1980年一級建築士事務所(株)金沢計画研究所を設立。1979年金沢工業大学建築学科教授。2012年副学長。グッドデザイン大賞(1997金沢市民芸術村)・日本建築学会作品選奨(1998獅子ワールド館・1999金沢市民芸術村)他、受賞歴多数。都市計画審議会委員(金沢市・高岡市・野々市町)・景観審議会委員(石川県・富山県・金沢市)他、歴任。

2014年3月28日(金) 17:00～19:00  
近江町交流プラザ研修室1にてインタビュー

——北陸そして金沢の都市環境デザインを長年に渡ってリードしてこられた水野先生に自分史も含めて、これまでの活動についてお話をお聞きしたいと思います。

### 学生運動が盛んな中、建築を志す

**水野:**水野です。大学に入学したのは1960年です。1960年というと、岸信介首相で安倍総理のおじいちゃん。学生運動が始まった頃、強かった頃です。1年の時から、国会へ動員されてデモを繰り返しておりました。理科一類の建築に入学したんですけど、その頃の建築は一番人気なくて、最低点で入れたんですね。原子力とか精密機械とかを落ちた人達が建築に半分ぐらいいて、45人のうち建築を目指して入ったのは20人ちょっとでした。

丹下先生の授業もあったんですけど、15回の授業うち、3回しか来なかったですね。運転手付きの黒塗りの車で乗りつけて、30分位して今日は忙しいからこれで終わりますって帰っていきました。その頃、丹下先生は助教授でしたけど、神様みたいな存在でしたから、3回の授業は全て覚えていますね。その中の1回が非常にロマンチックなんですけど、機能主義というのがあって、機能的なるものは美しいというテーゼがあったんですけど、丹下先生はそんなのはくだらないって、「美しきもののみ機能的である」と黒板に書いて授業をやったんですね。学生にとってはわくわくしちゃうような言葉でしたね。

その頃丹下先生は、「東京計画1960」という計画を立てたんです。東京湾を埋め立てて木更津のほうまで軸を伸ばして、東京を大改造しようってプロジェクトです。外苑くらいから皇居を通る軸を作って、そして集合住宅ゾーンやオフィスゾーンがあって、背骨はダブルのラダーコアという計画なんですけども、人口や工業、流通などを指標に設計していくんですね。やはり都市とはそういうものかと思っておりました。その理論で、東京と名古屋、大阪までの東海道を一つの都市として考えようという東海道メガロポリスを丹下先生が描くんですね。この東京計画1960とか東海道メガロポリスが出た頃に、下河辺淳さんと田中角栄さんが一緒になって日本列島改造

論を発表するんですね。そのときも工業出荷額を指標に、苫小牧とか四日市とかそういう生産基地の分散化を図り、国土を改造しようとする。けども、基本的には経済力や生産力みたいなものを指標にしなが、地方の発展と言いながらも徹底した中央集権主義を唱えたわけです。

一方で、ケヴィン・リンチの本が丁度読まれるようになっていたんですが、そこには違う都市デザイン論が存在していました。そのとき私が読んだのが、大谷先生の「URBANICS試論」なんですが、「都市の膨張という現象をあげれば、それは都市自らの意思によるのではなく、個々の単位の意思と行動の結果である」と、都市全体より、個々の単位の方が重要だと。都市全体が成長するよりも個が増殖していくとか個の力を信じて良いんじゃないかと。これは面白いと思いました。大谷先生は、一戸の住宅が集合して、そして都市をつくるという発想ですね。丹下先生の軸と比べると、だいぶ違うんですね。

もう一つ面白かったのは、「ARCHITECTURE WITHOUT ARCHITECTS」という本があるんですけど、これはヴァナキユラーな建築群でして、パプアニューギニアの人達が住んでいる家とか、日本の出雲の散居村とか、個の秩序みたいなものがある。それはその地域の風土や材料、文化などから出来てくるんだと、自然発生的な内発的な建築環境を取り上げているわけです。同時期に伊藤ていじさん、磯崎新さんや林泰義さんとかが「日本の都市空間」という本を発表するんですね。これも面白くて、色んな都市の作り方、都市の解釈みたいなものをやっていくわけです。

1964年、大学を卒業した翌年が東京オリンピックです。丹下先生の代々木体育館ができて、日本は海外に追いついたという気持ちにさせてくれました。丹下さんは都市的なスケールを必ず持ち込んできて、建築との間に介在させていく。丹下さんのチームが都市的の工作から建築的ディテールまで、面白いプロジェクトを続けてやっていたと思います。その後、東京芸大大学院に進学するんですけど、そこで、四国の外泊という集落の調査に行くんです。中庭型の家が斜面に沿って建ち並んでいるんですけど、中泊という集落が満タンになって、10年かけて新しい部落を作るんです。移住する住宅計

画です。40戸の住宅が全く平等になるためにはどうしたら良いかと。それから、外泊は四国の西側で台風銀座なんですね。それで、中庭というシステムを作って、庇の下まで石を積むんですね。そういうファンクショナルな、強固なつくりを10年以上かけて作る、そこに集落の美しさ、力強さみたいなものがありました。後にデザインサーベイという日本の町をもう一回見直そうという運動が起こるわけです。その先駆けになった仕事です。

### 単位論の建築を修得するために大谷研究室へ

**水野：**どこに就職しようかなという時に、当時、大谷さんは京都国際会議場のコンペに当選して、それが工事中だったんです。

「URBANICS 試論」の単位論がそのまま断面図になっているんですよね。それで、単位論の建築をやりたいということで大谷さんのところに入ることに決めました。もう一つの理由は、磯崎新さんがプロセス・プランニング論、菊竹清順さんがか・かた・かたちという三段階方法論、ルイス・カーンのマスター・アーキテクトやサーバント・アーキテクトなど、雑誌に設計方法論とその成果というものを発表するのが流行っていた時期です。そんな色んな人たちの設計方法論をやった中で、大学院の時に私が一番良いと思ったのが、大谷さんの単位論で単位と媒体という考えでありました。

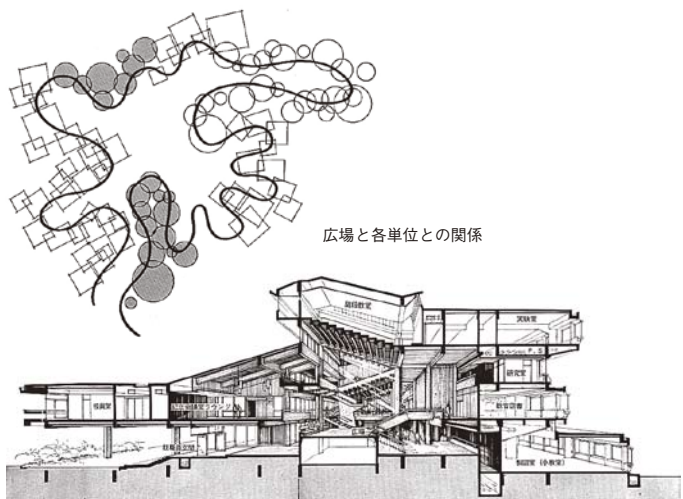
大谷研で最初にやった仕事は金沢工大の本館です。研究室、教室、事務室、実験室、色んな単位があって、それらにある種の近い関係や遠い関係がある、それらが作る何かルールがあるはずだと。例えば、実験室や製図室は大きく、教教室や研究室は小さい、教室や会議室、役員室や理事室はこういう形だ、そういうものが取り囲んで広場を作る。すなわち単位というのは、ポジティブな存在としてあって、それらがどこにあったら一番良いかというのを考えていく。排気ガスの実験をしていた実験室は、ガスを屋上に出したいので上の階とか、研究室は真ん中が良いだろうと。製図室とか教室は下の階で学生が動くのが良いだろうと。南のほうには、一日中いる事務関係が良いだろうとかやっていったんですね。このキャンパスの中に

学長も理事長も先生も学生も事務員も皆この広場を介在して歩くという建築を作ったわけです。普通の学校だったら教室棟、事務棟、実験棟、研究室棟とかを分けるんだけど、それを一緒のところに入れちゃおうとしたわけです。これはものすごく勇気のいることでした。デモが盛んになった時期です。例えば、学生がここを占拠したら先生や事務員や理事長はそこにいられなくなっちゃう。その微妙な関係をどうやって作るかっていうことです。それから、こちらでは冬は屋外が使えないので、屋内に広場を作らないといけないうのがあったんですね。大谷さんは学園を構成する三者がどうやって均衡を保つか、それらの存在をきちっと成立させてあげながら、共存しうる即ちこれが都市だという考えがあったわけです。

### 伝統工芸の振興と地方の自律へ

**水野：**大谷研に入って丁度10年後に金沢へ行きたいと思うようになるんですが、それは、田中角栄さんの日本列島改造論がおかしいんじゃないかと思ったことが大きな原因です。コントロールされた国土づくり、コンビナートなど製造中心の国土づくりというのではなくて、もっと百花繚乱の国土づくりがあるんじゃないかということで、青森から鹿児島まで調べたんですね。その中で、金沢が面白いと思ったのは、色んな時代の層がありそうだと、江戸も明治も大正も昭和もある。もうひとつは伝統工芸が面白かったですね。種類の数でいうと1位が京都で、石川が2位。出荷額では1位が京都、2位が鹿児島、3位が石川。日本伝統工芸展とか日展とかに入賞する作家数は1位が東京、2位が石川、3位が京都ですね。色々な部門でベスト3に入るものを持っている石川の工芸は確かに良いなど。

それで、1967年に金沢に引越す時に、決心が鈍るのがいやだから、私の本籍が日本橋なので、日本橋から金沢へというテーマで、宣言文を出したんですね。「新たな伝統工芸の発展と地方都市金沢の自律」という宣言文を配って、俺はこれで30年がんばってくるからということで金沢に来ました。そして、最初に書いたのが、「伝統工芸振興のもう一つの意味、地方の自律と連担」です。製造業じゃなくて文化だと。例えば、四日市も富山も名古屋もそうですけど、外力導入型で国家プロジェクトを入れて自分のところを元気にしようというのが日本の多くの都市です。明治以降の殖産興業とか、富国強兵とか産業というものを引き込んで、自分のところを活性化しようとするのが都市の生き方としてあると思ったんですけど、金沢や石川県は歴史上そんなことはないんですね。軍隊や第四高等学校がきたりすることはありますが、誘致運動をしているわけではないんですね。企業はあるんですけど、内発的に自分たちで起こした企業がほとんどですから、大量生産の大規模工場というのはいんです。要するに外力導入ではなく、内発的で自己の技術と感性を信じてやるという内発型の産業、文化、発展というテーマが金沢や石川県では成り立つんじゃないか、そういう意味で自律ということがあると。



金沢工大1号館



金沢に来て2つの研究を進めました。1つは「伝統工芸と街づくり・金沢の試み」というもので、総合研究開発機構に論文を書いております。この当時、伝統産業の工芸は石川県の工業出荷額の5%です。繊維や機械、食料品など95%は違うものを生産しているわけです。5%にしか過ぎないんだけど、日本の中でナンバー1とか2、3位になれるものは工芸だったんですね。工芸を旗印にして、マイナーだけど優れた技術と感性を持ったものをつくろうという運動にしていったわけですね。また、工芸の持っている美意識っていうか、あるいは目利きとか。そういう鑑識眼みたいなのがかなり市民にあるので、都市美や景観に繋がるはずだとか。でも、5%で食べられるわけじゃないから、それを梃子にして街を作ろう、産業を作ろうという運動です。「金沢伝統工芸街構想」というプロジェクトも、ハードウェアとして提案しました。



「伝統工芸と街づくり・金沢の試み」  
総合研究開発機構論文



「金沢伝統工芸街構想」

## 雪国の建築と工芸を梃子にしたまちづくり

**水野：**もう一つは、「雪国の居住環境」という本を書いたのです。当時、金沢の建築家も東京のモダンリビングとかを勉強して新しいデザインを作ることが仕事だと思っていました。でも、私は絶対違うと。金沢の色々な集落を調べて歩くと、雪国の知恵袋がいっぱいあったんですね。それを活かして設計をしていったら、新建築や建築文化が面白がってどんどん載せてくれたんですね。それが後に家庭画報やモダンリビングに出る。そうするとだんだん地元の建築家も考え出す。ですから、金沢らしさというと格子や黒瓦とか、そういった形態の伝統をいいますけど、機能的伝統から美しい現代建築を作ったらどうだということです。金沢駅東のドームも実は雪囲いなんです。また、駅から武蔵の間の再開発のビルに全部コロネードがついています。こうして雪国の建築と工芸を梃子にしながら、色々と街づくりや地域計画に入っていったわけです。

1981年、最初の地域計画プロジェクトとして、「兼六園周辺整備構想」を作りました。地域計画研究会という歴史、文化、文学、町並み、公園、緑といったJUDI的な私の友達を集めて作った報告書です。1982年には日本文化デザイン会議がありました。金沢は第3回目だったんですけど、草柳大蔵さんが議長で梅原猛さんや黒川紀章さ

んとかが金沢に来て、何のテーマが良いって言うから、私は、金沢は遊び続けて400年だから、遊びがいいって言ったんですね。その当時、名古屋は県民一人当たり工業出荷額や貯蓄高が日本一で、働き続けて400年。そういう意味では、そろそろ日本が高度成長から一段落してもう少し生活の質、成熟さ、遊びの感覚を入れてもいいんじゃないかと。金沢は遊び続けて400年っていうテーマで、「遊びをせんとや生まれけむ」という梁塵秘抄のあれをやろうと。それから1985年に、地元の人達と一緒に「フードピア金沢」というのをやったんです。これはFOODのフードと、風と土の風土を足した造語でして、食文化がメディアになるというイベントでした。これは今でも続いているんです。

## 旦那衆がまちづくりをリードしてきた金沢

**水野：**金沢に来た時に最初に会った経済人が清水忠という人だったんですけど、用水の保存を一生懸命やっているの、先生、応援してくれないかと。市内に用水が55本、150キロくらい通っているんですけど、細い道が多いので、車を停めたいために、用水にどんどん蓋をしていったんですね。その蓋を外す運動を経済人がトップに立ってやるんですね。それから、市役所のすぐそばに真黄色の斉藤旅館が出来るんですけど、それは評判が悪かったんです。その時に経済人たちは、この汚い建物を悪いて言うのは簡単だけど、悪い建物を非難するよりも、いい建物を褒めようということで、都市美文化賞を1978年に立ち上げるんですね。都市景観の日よりまだ前です。毎年、都市美フォーラムなんかをやったりして、都市美という運動を盛り上げるんです。それも経済人なんですね。僕は、明治や大正の建物の保存運動をいっぱいやったんですけど、いつも先頭に立ってくれたのは経済人でした。金沢は旦那衆がいる面白い都市です。そして、まだ旦那衆に力がある。

## 歴史的層性とは、過去の技術を残し、新しい層を重ねること

**水野：**1990年に「都市景観の日」が始まって、東京、浜松、北九州、名古屋と全国の5箇所でフォーラムをやるわけです。そこに出てくるメンバーたちの半分以上がJUDIに入るんですね。そして1991年にJUDIを立ち上げた時は、私の東大同期の加藤源さん、先輩の土田旭さんや曾根幸一さん、土木の窪田陽一さん、篠原修さん、GKの西澤健さん、照明の近田玲子さんとか色々な人達が入ってきております。面白い会議を立ち上げたから、水野も金沢でやれよということで、最初7人ぐらいで北陸ブロックを始めたんです。そしたら、加藤さんと土田さんに総会を金沢でやってくれといわれて、シンポジウムをやろうと。このときに、色々なコンサルタントや建築家、造園家などに参加してもらったりして、20名ぐらいになって、北陸ブロックとしてようやく形を成したんです。

私は、今73歳です。金沢へ来てちょうど37年経ちましたけど、人生の半分です。最初の頃は、やはり自己確認の作業であったかと思っています。新聞にも震災都市が復興して近代化してくると車にあった新しい都市環境ができてくる。そんな中で、金沢はなんだった、焼けりゃ良かったなんていう、どうしようもないこと言うんだね。それでも私たちが雪国の建築とか、町並み保存とか文化運動とかをやっていると、だんだん地域の自覚が出来てきて、その自覚作業が終わるとそれを使って振興策へと移っていくそういう手順になってきた。今、金沢が歴史都市やユネスコの創造都市に日本で初めて認定されたり、それから新しい建築では世界で最も美しい駅とか図書館とか、最も良い美術館とかも出来てきたりしている。要するに歴史的重層性というのは、過去の良いものもある、だけど今の時代の層の重ね方が大切で、だから我々の時代の役目というのは、過去の技術を残すことと、自分の時代の層をつくること、この2つが出来ないといけない。それから重伝建が市内に4箇所も指定されたり、こまちなみなんていう珍しい取り組みもやっていたりする。新幹線時代を迎えて、地域自身がやっとな地域主義に到達しているんじゃないかと思っています。

JUDIをつくる前までは、ほとんどの県市のプロジェクトを東京のコンサルタントがやって、地元のコンサルタントはその下請けみたいな形でフォローしていた。それを何とか脱却したいと、JUDIにみんなを誘って、自律するってことは、地域自身に考える力がなきゃ駄目なんだということをよく話しました。地域のコンサルタント、設計事務所、建築設計事務所というものがあることを目指して、これまでやってきました。

## これからの都市環境デザインに期待すること

**水野：**今、非常に難しい時代に入ったと思っています。国勢調査でも石川県は完ぺきに人口減少に入っています。金沢や野々市は維持していますが、県全体で減少しております。たぶん県市の予算も減少するでしょう。今後はメンテナンスしたり、リフォームやリユース、リサイクルしたりするという社会に入ってきている。そんな時に都市環境デザインはどうするのかという新しいテーマが生まれてくると思うんです。これだけ自然環境に恵まれているので、上手く都市環境デザインとマッチすると、住み良いところとして生き延びていく、成長を遂げていくかもしれない。都市環境デザインは、これまでは成長型、変えていくことに意味があったのが、これからは、成熟しながら、どうやって再編、再編集するか、そんなデザインになってくるんじゃないかなという気がしております。

例えば、金沢には犀川と浅野川という2本の川がありますけど、これは富山県境を源流として水源地帯から水源涵養林や中山間地域を通過して、里山や市街地に出て、そして田園を通過して、臨海集落を通過して、日本海に注ぐという。そこに金沢の全ての産業が成り立っていて、水源も水蔵も食糧生産も水力発電も用水のネットワークもある。要するにどうコントロールしておいしい水、空気、土、野菜をずっと保証するか。地産地消とかも含めて何か循環型経済や循環型産業、循環型自然環境や環境デザインみたいな、何かそんなようなのが出来そうな感じはしているんです。

記録：埜正浩（株式会社日本海コンサルタント）



金沢市民芸術村 (1996)